

## [XI. Congress of the European Biological Rhythms Society] 参加記

池上啓介

名古屋大学大学院生命農学研究科 博士課程前期2年

2009年8月22日から28日までのXI. Congress of the European Biological Rhythms Societyに参加した。今学会は、フランスのアルザス地方に位置するストラスブールにて日本時間生物学会の協力のもとで開催された。ストラスブールは過去何百年間フランスと隣接するドイツが領有権を争ってきた都市で、現在は欧州評議会や欧州人権裁判所、EU（ヨーロッパ連合）の欧州議会などを有するEUの象徴都市になっている。

ストラスブールには1673年創設という歴史あるストラスブール大学があり、その第一大学であるパスツール大学にて今大会は開催された。その大学名は「科学には国境はないが、科学者には祖国がある」という言葉で有名な生化学者であり細菌学者であるルイ・パスツールが教授を務めていたことに由来している。ルイ・パスツールは、そのほかにも分子の光学異性体を発見したことやパストゥリゼーションの開発、ワクチンの予防接種を開発した偉大な科学者である。そのような偉大な科学者が教鞭をとっていたところで研究発表できることに少し感銘を受けた。そのような科学者と道を同じくする欧州や日本を中心に世界各国の研究者420名ほどが集まり、由緒ある大学で8日間にわたりほぼ毎日朝の8時半から18時半まで今学会は行われた。

私と先輩であるD2の小野弘子さんは大会前日の21日にフランクフルトからバスでストラスブール入りした。20時過ぎストラスブール駅に到着したときには、まだ少し明るかったが予想していた以上に寒かったのが印象的である。名古屋から17時間の旅だったので非常に疲れていたが、何とか路面電車であるトラムの切符を購入して、旧市街を通過して大会の会場近くのホテルに向かった。ホテルはすぐに見つかり小奇麗なところで良かったが、滞在期間中時々シャワーの出が悪くなり困った。そういう設備の問題がほとんどない日本の便利さを実感した。

翌日、大会は夕方からOpening ceremonyが始まるということで、その日の午前中はユネスコの世界

遺産に登録されているカテドラル（ノートルダム大聖堂）やアルザス地方の伝統家屋「木組みの家」が林立したプティット＝フランス（小フランス）地区にトラムで行き、旧市街を歩きながらストラスブールの街並みを楽しんだ。かつては「木組みの家」は組み立て移動可能だったため「不動産」ではなく「動産」として扱われたそうである。美しい旧市街は歩行者天国になっており、車を気にすることなくのんびり観光ができた。



写真1 運河沿いに建ち並ぶ木組みの家。ここには多くの外国人観光客が訪れ賑わっていた。日本人観光客の姿もみられた。

2日目から本格的に学会が始まった。8時半から1時間のplenary lectureから始まり、30分間のコーヒープレイクの後30分間の著名な研究者のセッションが2つ、15分間の若手研究者のセッションは3つあった。その後1時間ほどポスターセッションが行われたのち昼食となった。この日の昼食は大学の学生食堂で食べたが、学食にワインが付いてくるなど外国ならではの食事であった。また、意外だったのが外国人に多いベジタリアン用の食事がなかったことだ。学会参加者の中にも何人かベジタリアンがいたが、その人たちは大変困って最後にはサイインゲンを大皿に大盛りに注文していたのには驚いた。午後にはまた午前同様セッションが密に詰まっっていて、夕方にはコーヒープレイクののち1時間半ほどのポ

スターセッションの午後の部が行われ、すぐ1時間のplenary lectureが18時半まで行われハードな1日を締めくくった。このようなハードスケジュールな毎日がほぼ毎日続いた。コーヒープレイクが30分もあることにも驚いたが、もっと驚いたことはコーヒープレイクでふるまわれる飲み物の中にビールがあったことと大量のお菓子がいくつかのテーブルにお皿いっぱい乗せられていたことだった。昼間から飲むことが普通で、それでも大丈夫なところにも驚いた。お菓子は日本では高くてもなかなか食べられないものもあり、現地ならではの楽しみも味わうことができた。今回は私にとって初めての国際学会であったため少なからず緊張はしていたが、それと同様に“論文などで名前は知っているけど、顔を知らない”海外の著名な研究者の講演を聴ける貴重な機会として非常に楽しみにしていた。そのため少し図々しかったと思うが、コーヒープレイクの時間や機会があるごとに自分から挨拶に行ったり、先輩や海外の研究者に紹介してもらったりして何人かの著

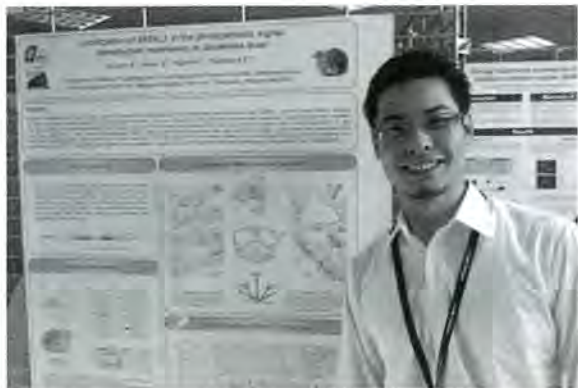


写真2 ポスター前での記念撮影。セッション時間中の撮影のため少々緊張気味の筆者。



写真3 ストラスブールの市長による歓迎会。ワインとお菓子で結構盛り上がりだったが、物足りなさから後に旧市街へ食事に出かけた。

名な研究者とも話することができた。話してみると、とても明るく気さくな研究者が多かった印象がある。

3日目の24日は私のポスター発表日であった。ポスター発表の会場には比較的小さな部屋が何箇所か割り当てられていたのには少し驚いた。日本の学会のように大きな会場を想像していたからだ。また、部屋は窓が開けられることもなく夕方であったため直射日光が降り注ぎ、大の大人たちが迫熱した発表議論を行うものだから中は蒸し風呂のようになっていた。私が発表した研究は“Localization of BMAL 1-like immunoreactivity in Japanese quail brain”というタイトルで、作製したBMAL 1抗体が免疫組織化学で機能することがわかり、これまで確認できていなかった鳥類の脳内における時計タンパク質の組織レベルの詳細な局在を初めて確認したという内容であった。日本では、鳥類を研究している人は少ないが欧州では比較的多くの研究者が鳥類の時計を研究しており、その抗体や局在に関心を示して発表を聞きに足を運んでくれた研究者もいた。1時間半ほどのセッション中に6人ほどの方が聞きに来られ、それらのどの研究者も熱心に質問を投げかけてきた。それらの質問に答えるのにも、事前に練習はしていたおかげで概ね思ったように答えることができたことは大変自信になった。1対1で応答するポスター発表で、慣れない英語での発表は非常に神経を使うことだと痛感し、さらなる精進が必要だと感じた。また、発表以外でもこのような機会に日頃論文でしか知ることができない研究内容や最新の内容を直に聞くことができより細かい情報を聴けたのとはとても有意義であった。

この日の講演で一番印象に残ったのが、カナダのDr. Anthony Ho (University of Alberta) の講演でAa-natの転写メカニズムを解明したという内容だった。これまでCREを介する制御は知られていたが、別の経路が示唆されていた。そこで彼はクロマチンリモデリングに着目し、実際Aurora Cというヒストンリン酸化酵素が制御していることを解明した。さらにCREを介する制御についてもそのメカニズムを詳しく調べ、Salt inducible kinase (Sik 1) が核内のCREBをリン酸化するTORCの核内輸送に働いていることを解明した。新たな制御機構を解明するという大変な研究に興味をひかれ、その仕事量の多さに驚いた。彼の今後の研究にも注目していきたいと思った。

翌25日の夜にはストラスブール市長による歓迎の

宴がオーランジェリー公園内の立派な建物で催された。実はこのとき、日本では「幸せを運ぶ鳥」として知られているがほとんど見る事ができない「コウノトリ」がその建物の屋根に巣を作っているところを幸運にも見る事ができた。宴はワインとお菓子くらいだったので、その後日本人研究者たちと旧市街まで夕食を食べに行くことになった程であった。

4日目の26日は若手研究者で日本、ヨーロッパ、フランスの時間生物学会若手奨励賞またOrganizer committeeの若手奨励賞を受賞した日本人2名と海外の研究者2名による講演だった。印象としては、外国人研究者よりも日本人研究者の方がクウォリティーの高い内容に思われたことだ。受賞した中村渉さん（阪大）と安尾しのぶさん（フランクフルト、ドイツ）がとても高いレベルの研究をしていることに、ドクターに進学予定の自分としてはとても刺激になった。また、学会全体を通して感じたことだが、海外の研究者はプレゼンテーションが非常に上手で、聴衆の笑いをとったりして引きつけ、話を壮大なものにするのが巧だということを感じた。プレゼンの上手さには学ぶことが非常に多く、そういった聴衆を引き付ける話し方を勉強するの必要を痛感した。

その日の午後からは、EUの欧州議会が開催される本会議場に見学に行った。2組20人ずつくらいに分かれ、私は後半組で見学した。案内人の男性職員が異常なまでの熱意がある人だったため、予定時間をかなりオーバーしてしまった。短気な日本人なら分からなくもないが、比較的のんびりしている欧州出身のほかの参加者も苛立ちを隠せなかったくらいだったのだから相当だったのだろう。そのおかげで、後半の内容はあまり覚えていないのだが、覚えている前半の説明の内容だと総ガラス張りの建物はEUの透明性を、球体の本会議場は連帯感を示している



写真4 European Parliamentのツアー前に撮影。ガラス張りの建物が印象的。

そうだ。

そんな欧州議会の見学を終えたのち、夕方から30分ほどバスで移動して趣のある建物に向かった。そこで懇親会が開催され、夜風が気持ち良いテラスで食前酒を楽しんだのち、席につき本格的なフランス料理を楽しんだ。このとき驚いたことは、海外の研究者はほとんどドレスアップや正装をしてくるものと思っていたが、私服の人も結構いたことである。私は正装と思い込み日本からスーツを持っていったが、スーツを着る雰囲気ではなく上着とネクタイは外して参加した。ただ、正装してきた方も多く、その着こなし方には感心させられた。食事の途中、今大会の主催者であるバスツール大学のPaul Pévetをはじめ、今は有名な教授方の若かりし頃の写真などをスライドショーで公開したり、抽選会を行い和やかな雰囲気のなか会食は進んだ。賑やかな懇親会は遅くまで続き23時ごろ帰宅の途につき始め、ホテルに着いたころには0時を過ぎていたくらいであった。



写真5 懇親会のディナーの様子。あまりにも広いため料理が行き届くだけでも時間がかかった。

翌27日は私の研究分野である「光周性」に関する講演の日だったので、朝から楽しみにして講演を聞いた。お昼にはランチョンセミナーに参加した。レクチャーが行われたホールの入口でサンドウィッチやフルーツが入った紙袋をランチボックスとしてもらい、昼食をとりながらレクチャーを聴くという流れだった。昼食をとりながらという点では日本の学会と同じだが、日本の少し豪華なお弁当とは違い、紙袋にフルーツが入っていて軽食のような形なのが特徴だった。その点で、大食いの私には少し物足りなかった（当然その後のコーヒーブレイクでお菓子をたくさんいただいたのだが・・・）。その日の午後には、私の指導教官である吉村崇先生の講演を聴いた。私にとって、その後のPlenary lectureで講演したD. Hazlerigg (UK) の哺乳類での光周性測時機構

の研究が印象に残っている。これまで光周性のマスターコントロール遺伝子は *TSH β* と分かっているが、概日時計との関連は分かっていた。彼は *TSH β* のプロモーターに着目し PAR-bZIP タンパク質が結合する D-box が関係している可能性を示唆した。私の研究と関連があることなので興味を持って聞いたが、そのほかにも彼のプレゼンのうまさには驚かされた。聴衆の笑いをとったり、過去の研究との関連を上手に語ったりしていた。

その日の講演終了後、広島大学の内匠先生、名古屋大学の海老原先生、岡山大学の富岡先生らとともに本格アルザス料理を食べに旧市街に歩いて向かった。それまでトラムで移動していたので旧市街までは遠いと思っていたが、思ったより近いことがわかり小さな町ということを実感した。入った店は小さかったが中はとても趣があった。食前酒、前菜といった順に運ばれ、どれも日本では味わったことのない味付けで非常においしかった。中でも印象的だったがデザートはチーズだった。これは他の方が注文したのだが、匂いがきつくて食べられないということで少しいただくことになった。その匂いというのが、なんと鳥を研究している私にとって頻繁に嗅いでいる鶏フンのおいだった。現地ではこの香りを良いとしているようだが、私は日々の実験をフラッシュバックさせられ現実に引き戻されてしまった。値段はシャンパンやワインをいくつか頼んだこともかなりしたが学生ということで先生方や先

輩方に多くを持っていただきとても有難かった。

翌日の最終日は午前中でおしまいということで昼からは近郊の町でおとぎ話に出てきそうな伝統的な町並みが有名な「コルマル」という町に行った。ちょうどストラスブールの町を凝縮したような小さな町で歩いてしっかり回ることができた。帰りに乗る予定の電車の1本前の列車で自殺があり、列車が立ち往生する場面もあったが、無事帰ることができた。その後、ストラスブールの運河を周遊する水上バスに乗り旧市街の周りを1周した。印象に残っているのは、上流と下流で水位が違うため、水門による水位調節をして周遊したことである。初めての体験で水位調節の間船が浮かぶ様子など大変楽しかった。こういう日本では考えられないようなゆったりとした雰囲気の中で研究すると、また別のアイデアも浮かぶのではないかという気さえた。

とにかく今回の学会はとても忙しく長い学会であった印象である。しかし、初めて海外の国際学会に参加し、著名な研究者から若手の研究者など様々な人々に刺激を受けてより一層計画的に機敏に研究に打ち込まねばという気持ちになった。今回の経験は今後の研究者としての人生にとって大きな糧になることは間違いない。このような機内を与えてくださった吉村崇先生や、この参加記への投稿機会を与えてくださった海老原先生や富岡先生ほか日本時間生物学会の関係者方に心から感謝したい。

## 学会参加記：欧州時間生物学会を振り返って

小野大輔

北海道大学大学院医学研究科 時間生理学分野

フランス、ストラスブールで「欧州時間生物学会」が開催され参加してきました。私自身、海外で行われる国際学会の参加は今回が初めてということもあり、緊張以上に心が弾むような、胸が高鳴る気持ちでした。普段論文の中でしか会うことのできない著名な研究者と実際に会うことができ、話ができるチャンスはそうめったにあることではありません。リズム研究を始めて数年かつ学生の身分である私にとってはそんな経験はほとんどないので、非常に意

義のある経験ができたと感じています。今思えば、もう少し勇気を持って積極的に話をすべきだったと思います。

さて今回行われた学会は、1週間で12のlectureと21のsymposiumおよび数多くのポスターがあり、University of Strasbourgで行われました。会場は二つの大講堂およびポスター会場がいくつかの部屋ごとに分かれていました。今回は大学構内で行われたということもあり、かしこまった雰囲気は感じられ

ず、コーヒープレイク時には多くの人々が外に出て、コーヒ一片手にパンをかじりながらあれこれ話をしていました。そして、ストラスブールは非常に歴史を感じさせるような古い建物が数多く並んでおり、その中に違和感なく大学の敷地が溶け込んでいる感じを受けました。参加人数は合計450人程度（正確には分かりませんが）と聞き、こんなにも多くの人々が、そしてそれ以上の人々が「時間生物学」というくくりの中で研究をしているのだと肌で実感たとともに、時間生物学という範囲の中でも非常に幅広い研究がある事もあらためて感じさせられた学会でもありました。



写真1 学会会場入り口

学会初日はレクチャーが一つあり、その後get together partyがありました。そこでは3種類のワインとたくさんの種類のオードブル（パンが多かった）ができました。その次の日から本格的な学会が始まりました。最初にGenetic dissection of the circadian clock in MammalsというタイトルでJ. S. Takahashi先生のレクチャーがありました。テトラサイクリンを用いたプロモーター ON, OFFのシステムをin vivoに応用し、自由に目的の遺伝子の発現を調節し、その時の肝臓の遺伝子発現リズムおよび行動解析を行う研究内容で、今までにない手法を用いたアプローチに、研究のおもしろさと可能性を素直に感じました。

哺乳類の視交叉上核という点では、E. Maywood先生の研究が非常に興味をかき立てるような内容でした。彼女らは時計遺伝子の転写・翻訳を介したループと、cAMPのループが互いにカップルしていることを主張しており、Per 2::LUCマウスのSCNをスライス培養し、さらにその上にLucをもたないマウスのSCNをco-cultureする内容でした。リズムが明瞭に見られないノックアウトマウスのSCNであっても、co-cultureすることでリズムが出現すること

を、イメージングを用いて示しました。私の研究テーマは同じようにSCNにあり、この発表を聞きながらぞくぞくするような感覚をもったのを覚えています。その後の発表ではSCNでPer 1を発現している神経とそうでない神経からパッチクランプを用いて電気活動を測定し、それらの差について論じた発表がありました。発表者は前日に論文がScienceにアクセプトされたということで発表前に会場から拍手をうけていました。これらの研究発表を通して、SCNに着目するだけで、いろんな方向からの見方やアプローチの仕方、考え方があるのだと考えさせられたとても有意義なセッション（S5: Exploring spatiotemporal organization of SCN circuits）だったと個人的に思います。

幸運にも同じセッションで私たちの研究を発表する機会があたえられました。大学院生のうちにこのような場で発表できることは非常に幸せなことです。そして多くの研究者に知ってもらえるチャンスでもあります。もちろんこんな機会は生まれて初めてのことです。今回の発表はとても緊張はしましたが、すこしだけ発表というものを「楽しむ」事ができたという点でとてもいい経験ができたと思います。セッション終了後にそのセッションの発表者が集まり写真を撮ってもらうことができました（その写真はもらえるのかわかりませんが）。著名な研究者と一緒に並んで写真を撮れた事も私にとっては大きな事でした。



写真2 シンポジウムでの一コマ(中央発表者が筆者)

SCNに興味をもって研究している私にとって、それ以外の研究を直接聞くことができたこともこの学会で得られた財産の一つです。そのなかでも特に吉村崇先生の行っている光周性の研究発表が印象的でした。ニワトリのDNAチップを用いてウズラにおける光周性の制御機構をつきとめ、さらには同じメ

カニズムが哺乳類のマウスでも存在することを証明した研究発表でした。光周性のセッションでは、多くの発表者がこれらの研究成果を引用しており、非常に意味のある研究成果なのだと感じました。意味のある研究をしなければならないし、そのような事を考えながら研究をしなければならないと認識させられます。また、光周性と概日時計という点で、今後大きな研究の進展があるのではないかと想像しました。また、同じ名古屋大学の近藤孝男先生の研究も可能性を感じるような内容でした。シアノバクテリアについては深くは分かりませんが、KaiCのリン酸化に注目し試験管内でリン酸化リズムを再構築し、リン酸化リズムの生じるメカニズムをあきらかにしようとするものでした。最後は生化学の話に移り変わり、いささか私の理解力では話についているのかどうか分かりませんでした。 「リズム現象」という点でどこかにヒントが転がっているのではとふと感じました。

この学会ではランチョンシンポジウムがある日とない日がありました。お昼のシンポジウムがない日は、大学のカフェテリアでご飯が食べられます。適



写真3 大学内カフェテリアのメニュー



写真4 バンケットの風景

当にサラダ、チキン、デザートと列に並びながら選んでいきます。そして、なんと最後にワインが置いてありました。日本では（少なくとも北大では）お酒がおいてある食堂は知りません。フランスでは当たり前のことなのでしょうか。昼間から飲んでいいのでしょうか。とりあえず自分のグラスに注いでしまいました。料理はおいしく満足いくものでしたが、量が多く食べきれませんでした。夜のバンケットではフランスだけに豪華な料理ができました。もちろんナイフとフォークを使うような立派なものです。8時前くらいから始まり、終わったのは12時くらいだったと記憶しています。もちろん食べているだけではありません。レクチャーもありました。

今回の欧州時間生物学会は1週間にわたり行われたせいか、他の研究者や大学院生などと接するチャンスが多々あり、私にとっては非常に刺激的な学会だったと感じております。そして時間生物学という中でも多方面にわたるおもしろい研究を肌で感じる事ができただけでなく、自らの研究成果を示す事ができたのではと思います。そして何よりもこの学会を支えてくれた方々なくしてはこのような経験を得ることはできなかったと思います。

## XI. Congress of the European Biological Rhythms Society参加報告

田原 優

早稲田大学先進理工学研究科 電気・情報生命専攻 生理・薬理研究室(柴田研究室)

2009年夏、私は時間生物学会からトラベルアワードをいただいて、フランスのストラスブールで行われたヨーロッパ時間生物学会に参加してきました。のべ400人相当という参加人数、そして全部で7日間におよぶとても長い学会は、学会参加経験の浅い私には、かなり刺激的であり、また精神的にも辛い経験でした。今回はここで学んできたこと、感じたことを少しではありますが報告させていただきたいと思います。

まず本学会に参加して特に良かった事は人脈が広がった事でした。それは他大学・研究所の先輩方と知り合えた事、偉い先生方に顔と名前を覚えていただいた事、また海外の同じ研究内容で戦う研究者達と知り合えたことです。本大会は日本時間生物学会と共同開催ということでしたが、それでも日本人は20人ほどしか参加していませんでした。そのメンバーの一人として参加出来た事はとても光栄であり、また素晴らしい研究成果を発表してきた他の日本人の方と知り合えたことは、今後の研究生活に必ず役立つと信じています。

次に研究発表に関してなんですが、これは一番緊張したことであり、また良い経験でもありました。私は正直英語が得意ではありません。それでもポスターの前でなんとか外人に自分の研究内容を説明でき、自分が伝えたいことを一生懸命説明し、そしてその内容に関して熱くディスカッションできたこと、これは本当に良い経験になりました。また、私は現在修士2年として、柴田先生の研究室で、末梢組織の制限給餌性のリズム形成について研究しています。この分野はシンポジウムもいくつか行われ、非光依存性の同調刺激として話題の研究テーマとなっております。おかげでポスター発表では多数の方が質問に来て下さり、私と近い研究内容の研究者とたくさん知り合うことができました。

そして忘れられない出来事は3日目の夜の立食パーティーの時に起きました。なんとTakahashi先生と一対一で話す機会があったのです。ふらふらし



左から重吉先生、SONYの浅川さん、筆者

ている時にふと目があってしまい、勇気を持って自己紹介してしまいました。そして自分の研究内容や、Takahashi先生の現在のお仕事などをお聞きすることができました。とても優しい方で、私の下手な英語も熱心に聞いてくれました。

私は今年の8月は、前半に北海道で行われた札幌シンポジウム、後半に本学会に参加させていただきました。これは柴田先生に本当に感謝しなければならぬことだと思っております。またこのご恩は今後の研究成果でお返しすべきだと感じております。そしてこの2回の国際学会で、私は近年の時間生物学会の行方というか流行りというか、現在多くの研究者が何を知らたいかを知りたいのかを、少しでも自分なりに理解できたのではと思いました。札幌シンポジウムでは本間先生の主催ということもありまして、SCNに関しての話題が多いと感じました。高感度CCDカメラを用いたSCNの個々の細胞における発光測定系、またその際のCa濃度、VIPなど、SCNの発振機構の解明が徐々に進んでいることが実感できました。本学会においては、もとはメラトニン研究会だったということもあり、メラトニンの生成や受容体に関するシンポジウムが多数開催されていました。

また、私の研究テーマである制限給餌に関しては、やはりFEO (Food Entrainable Oscillator) の探索が話題になっていました。そして6日目の昼のシンポ

ジウムでは、Mistlberger先生が主体になってFEOの議論が行われました。これはMistlberger先生が最近の研究動向をまとめた後、中村先生、柴田先生他、偉い先生方が5分間ずつのデータ発表会を行うという形式でした。みなさん最新のデータを持ち

寄っていて、私にとっては胃が痛くなるほどでしたが、今回の学会で一番役に立ったシンポジウムでした。

以上で短いですが報告は終わりにします。最後に、トラベルアワードを下された日本時間生物学会に、もう一度感謝の意を申し上げます。

## 国際学会を終えて ～フランス7日間の旅～

平尾彰子

早稲田大学人間科学研究科修士2年

広がる畑、点々と建ち並ぶ軒並み。飛行機の中から見下ろした景色は、まるで絵本の中から飛び出したように綺麗で壮大。これが、今回大会が執り行われたストラスブールとの出会いでした。

ドイツとフランスの間を振り子のように行きつ戻りつしたアルザス地方。その中心地、ストラスブール。言葉もドイツ語になったり、フランス語になったり。今は言うまでもなくフランス語なのですが、かなりドイツ語の影響があるのでしょうか、アルザスにいたことのある友人の話によると独特のアルザス語になっている方も多いようです。

広場の名前に名を残す印刷技術のゲーテンベルクや宗教改革のカルヴァンをはじめ、ゲーテ、モーツァルトなどが一時的とはいえ滞在したという歴史ある街。

大聖堂やプチ・フランスなどを含むその旧市街は、1988年にユネスコの世界遺産に登録されています。街の名前の由来が、ドイツ語で「街道の街」というだけあって、昔から交通の要所。駅舎も伝統を感じさせる石造りなのですが、今ではそれを透明素材で

覆って近代的なイメージにしています。さすがは、EU欧州議会の在り所。明日をめざす心意気が感じられるようです。駅前にはきれいな広場になっていて、芝の上で昼食を食べる若者や旅行者たち。そしてその半円形の広場を囲むように並ぶ多くのホテル。活気と安らぎが同居する街といった印象を与えてくれました。

今まで学会発表を国内だけに留めていた私は、海外で発表するという事実をととても光栄なことと受け止めると同時に相当の不安も抱えていて、正直複雑



ノートルダム大聖堂



学会会場風景



な気持ちで一杯でした。しかし、いざ大会が始まるとそのような気持ちは一掃されてしまいました。セッション会場が暑すぎて息苦しくなるほどの人口密度が朝八時半から夜八時ころまで続くのです。その熱気と周りのモチベーションの高さに圧倒され、不安に駆られる暇もなく“とにかくついていこう”“できるだけ努力をして帰ろう”と思えるように考え方が変わっていったのを、今でも鮮明に覚えています。

国内の学会に比べて、女性が多いことも驚いたことの一つでした。男性の社会、女性の社会という考えはもう古い。頑張ることに性別は関係のないことが当たり前の社会。日本の固定観念に捉われてはいけないのだと考えさせられました。

また、大会に参加していた教授や研究者の方々との出会いも私にとって素晴らしいことだったと思います。普段研究室で生活していると、どうしても井の中の蛙になりかねない。自分の実験しか知らなければ新しいアイデアも、違った方向性からの考え方も身につかない。すると、結果的にいい研究にはつながっていかない。そう思いながらもなかなか機会には恵まれないものです。国内の学会でもこの理



交流パーティーにて  
(右から)柴田先生、Silver先生、筆者



同じテーブルの仲間たち

論は成り立つと思いますが、さらに国際学会ともなると、さまざまな国の考え方も加わるため、そのアプローチはより強いものを感じられました。

ポスター発表をしていく上で英語が苦手でコミュニケーションがなかなか取りづらいことも悩みの一つでした。説明するたびに“*I'm not good at English sorry...*”と平謝り状態。変な汗まで出てきてパニックに陥りそうでした。しかし、その時に言われた“*If your data is excellent, it isn't influence your English.* データが良ければ英語力なんて関係ないよ”という友人の一言ではっと目が覚めたような気持ちになり、英語ができないという劣等感に苛まれるがあまりに、本来の目的を忘れていた自分がいたことに気がきました。今までの自分の成果を皆さんに聞いてもらうということを。私は“自分のデータに誇りを持って発表すること”こそ今までの研究成果に携わったすべての方々や動物たちへの恩返しであると考えています。その絶好の機会に自分本位になってしまっていたことがとても恥ずかしかったです。そして、拙いながらも一生懸命に“伝える”努力をすればきっと理解してくれる。そう意識が変化していき、徐々に話すことができるようになっていきました。たった1時間半ほどの発表でしたが、自分の言葉で説明した内容が伝わった時の感動は、言葉で言い表すことができない位に嬉しいものでした。

初めてのフランス、初めての海外発表。楽しいことも沢山ありました。しかし、それと同じくらい大変なことも、困ったこともありました。今、この7日間の国際学会を終えて、自分自身の成長を心の奥底から嘸み締めています。

最後になりますが、柴田先生、田原君、学会で出会えたすべての方々、そして、学会中日本で実験をサポートし続けてくれた後輩たちに心より感謝の意を示して報告とさせていただきたいと思います。



学会帰りにCelineと